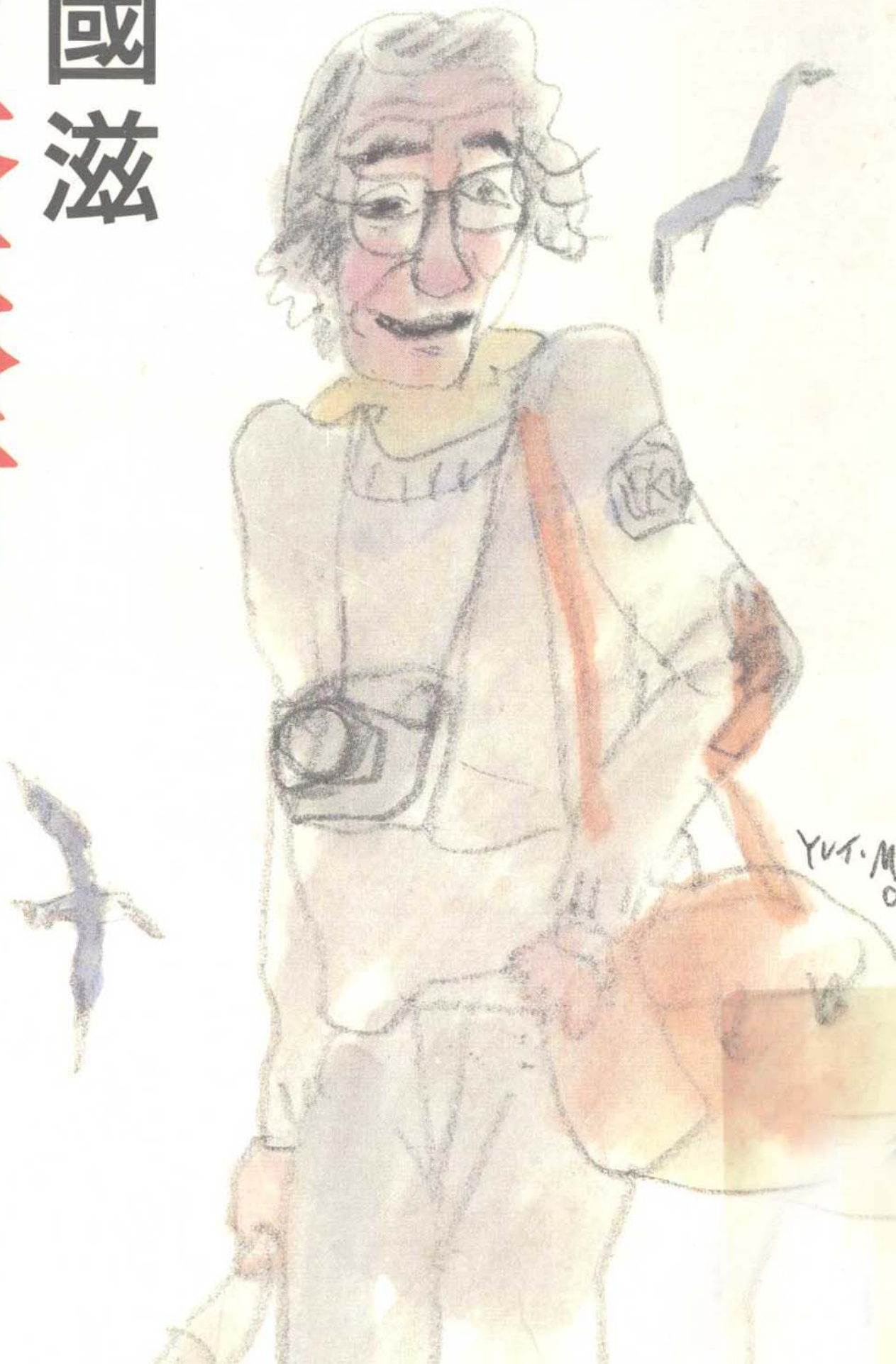
# 阿呆旅行

江國滋



新潮文庫

# 阿呆旅行

新潮文庫　　草378＝1

昭和五十九年十二月十日　印刷
昭和五十九年十二月二十日　発行

著者　江國滋
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(〇三)二六六―五一一一
編集部(〇三)二六六―五四四〇
振替東京四―八〇八番
定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

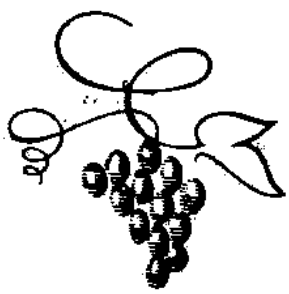
印刷・株式会社光邦　製本・憲専堂製本株式会社
© Shigeru Ekuni 1973　Printed in Japan

ISBN4-10-137801-0 C0195

新潮文庫

# 阿呆旅行

江國滋著



新潮社版

3335

# 目

# 次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

白い飛礫(つぶて)の　札幌 P.171

白い墓地　網走 P.35

おばこ、恙(つつが)なきや　庄内 P.124

北海わいん唄
池田町 P.264

ととらく紀行
能登 P.45

滾(たぎ)るまで　秋田 P.182

三景の末路　松島 P.148

旅に病んで　高山 P.216

裸体写真撮影行　奥日光 P.253

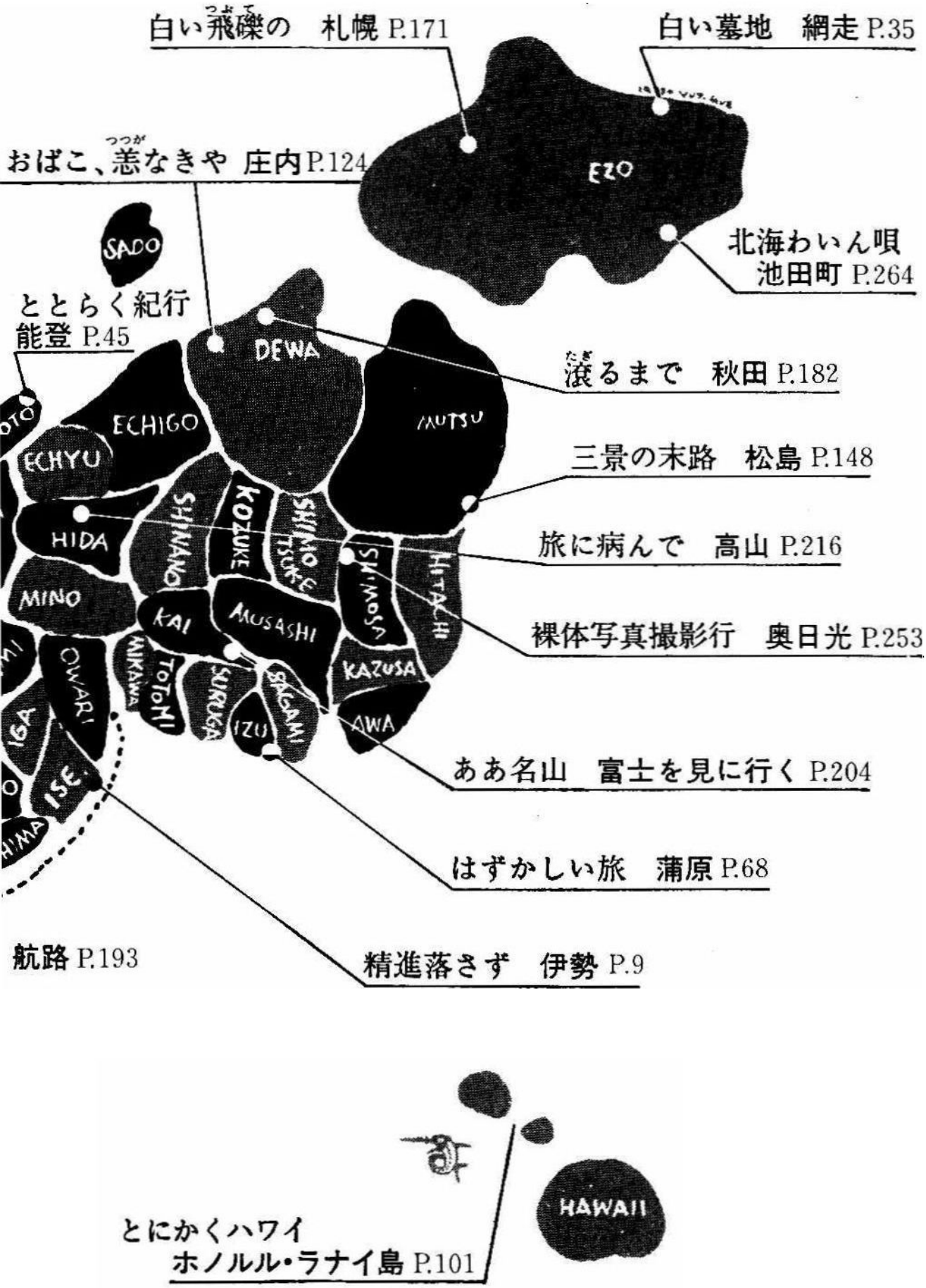
ああ名山　富士を見に行く P.204

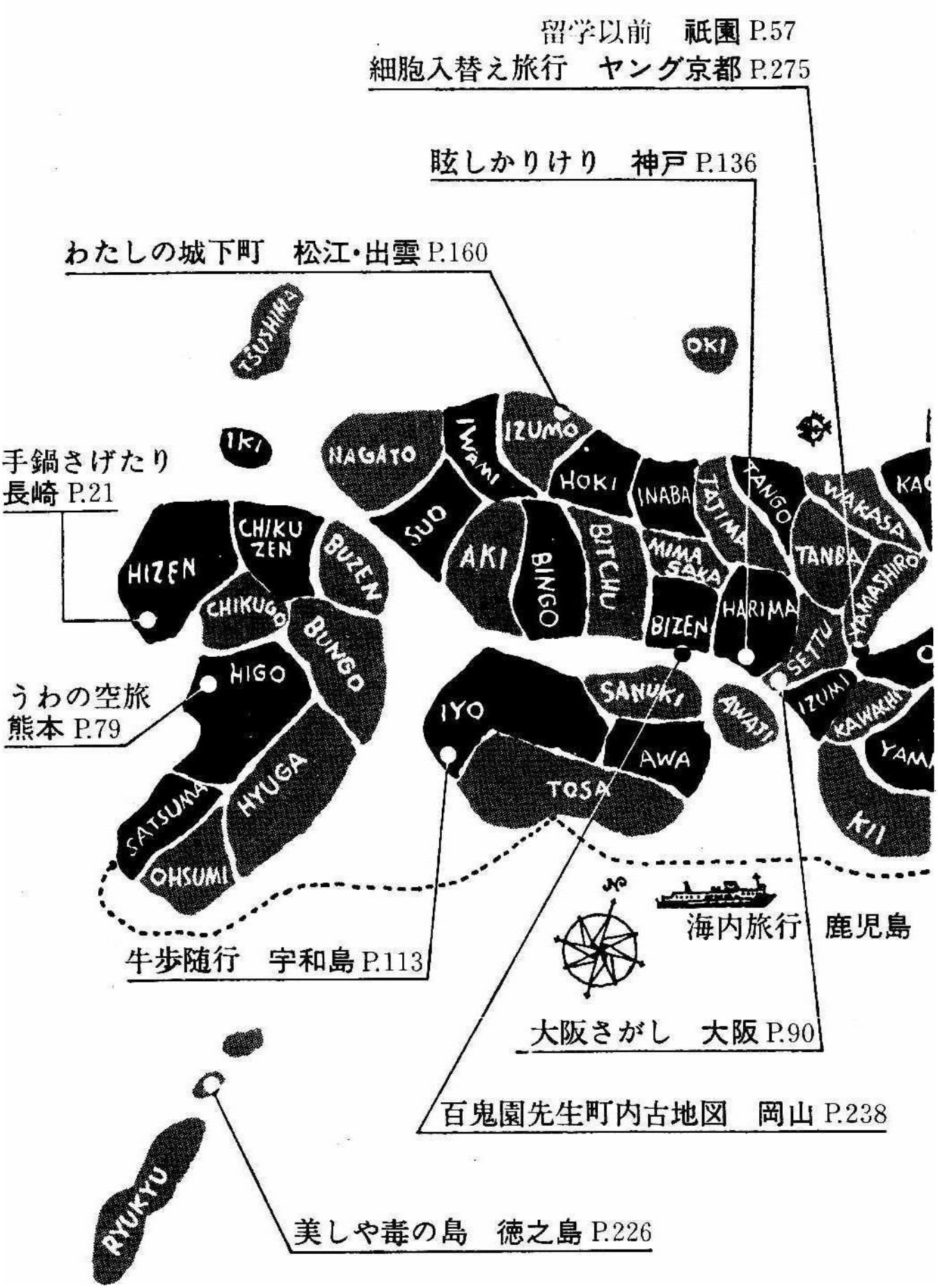
はずかしい旅　蒲原 P.68

航路 P.193

精進落さず　伊勢 P.9

とにかくハワイ
ホノルル・ラナイ島 P.101




留学以前　祇園 P.57
細胞入替え旅行　ヤング京都 P.275
眩しかりけり　神戸 P.136
わたしの城下町　松江・出雲 P.160
手鍋さげたり
長崎 P.21
うわの空旅
熊本 P.79
牛歩随行　宇和島 P.113
海内旅行　鹿児島
大阪さがし　大阪 P.90
百鬼園先生町内古地図　岡山 P.238
美しや毒の島　徳之島 P.226
TSUSHIMA
IKI
OKI
NAGATO
IWAMI
IZUMO
HOKI
INABA
TAJIMA
TANGO
WAKASA
TANBA
TAMASHIRO
HARIMA
SETTU
IZUMI
KAWACHI
YAMA
KII
AWAJI
SANUKI
AWA
TOSA
IYO
BIZEN
MIMASAKA
BITCHU
BINGO
AKI
SUO
HIZEN
CHIKUZEN
BUZEN
CHIKUGO
BUNGO
HIGO
HYUGA
SATSUMA
OHSUMI
RYUKYU

カット　村上豊

解説　宮脇俊三

# 阿呆旅行

# 精進落さず

## ——伊　勢——

### 1

お伊勢さんに詣でて、それで、向う二年間のこの企画の、道中恙なきことを祈念しようなぞという、そういう殊勝な気持が、そりゃ、ないこともなかったが、ふだん神前に手を合わせたこともない人間は神様にしてみれば一見のお客にすぎないわけで、そんな一見客の虫のいい願いをそう簡単に神様が聞し召すわけがないのであって、だから二年間の無事を祈るというのは、あくまで付帯目的にすぎない。そんなら主たる目的は何かというと、それが、あるようなないような。

当年とって私は三十六歳である。お正月がきても三十七歳にはならない。けれども、昔の流儀に従えば、すぐ目の前の昭和四十六年一月一日付で不意に三十八歳。一歳どこかにいってしまう。六か八か。そんなことはどうでもいいことで、いったい何を言いたいのかというと、三十六だか八だかになって、実は私、まだほんとうの男になっていないのである。ウヒヒ……なぞと、はしたない想像をめぐらしてはいけない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

伊勢へ行きたい伊勢路が見たい
せめて一生に一度でも
ソリャソリャヤートコセ

という『伊勢音頭』の文句は、あれは誇張でもなんでもなくて、日本人一般の切なる願望だった。そんなところから、由来男たるもの、一に女を知り、二に横根を切り、三に伊勢参りをすませて、それではじめて一人前、といったような言い伝えが残っている。私は富士山には三回登ったけれど、残念ながら、一度もお伊勢参りをしたことがない。したがって、男としてはいまだに半人前。男になりたい男になりたいヤートコセ、である。

どこに行きますか、といわれて即座に「伊勢」と答えたのは、つまりこのへんで男になるのも悪くないなと考えたからにほかならない。それにもう一つ、年頭一月四日には時の内閣総理大臣が閣僚を従えて、何を祈念なさるのかは知らねども、毎年欠かさず伊勢神宮に参詣なさることは〔宇治山田発〕の新聞記事で夙に存じ上げている。総理大臣に続いて、衆議院議長が一月七日、某元大臣が一月何日、某々大物代議士が一月何日……と、えらいお人の伊勢参りはみんな年頭に集中しています、とあとで伊勢市役所の助役氏が教えてくれた。

驥尾に付す、という言葉もある。お歴々の顰みに倣って、私もめでたい第一回を〔宇治山田発〕で飾ってみたい。第一回の原稿が雑誌に載るのは新年号であって、新年号の締切は新年よりずっと早いので、一月に出掛けていたのではまにあわない。必然的に私の参詣のほうが一と足お先に、という結果になるわけで、してみると、驥尾に付すのはむしろあちらさん

と思えば思えないこともない。なんだか、だんだんえらくなってきたような心持がする。

えらいといえば、伊勢神宮でいちばんえらいお方は徳川宗敬大宮司である。お名前で察しがつくとおり、徳川御三家の一、水戸徳川家のお生れで、元伯爵で、奥様が十五代将軍徳川慶喜公のお孫さんで、それで大神宮の大宮司とくればまったくもって雲上人である。その徳川大宮司にさるお方のご紹介で謁見が叶うことになった。

旅仕度をととのえるうちに、胸がわくわくしてきた。

正午発ひかり37号は全車輌座席指定である。10号車6A予約番号32のシートにすわって、しばらくのあいだ口もきけないほど胸がどきどきして閉口した。これはさっきのわくわくとはまったくの別物で、なにしろ同行三人、息せき切ってとび乗ったとたんにドアがしまり、6A6B7Aにめいめい腰をおろしたときには、もう品川辺にさしかかっていたのだから心悸亢進も無理はない。こう書くと、いかにも発車時間ぎりぎりに東京駅にかけつけたようだけれど、それが決してそうではなくて、発車三十分前に地下の名店街でとっくに待合せを完了していたのである。それで、たっぷり時間をみて改札口を通ろうとしたら、三人のうちの私でもカメラマンでもないもう一人がとびあがって叫んだ。

「しまった、切符忘れてきたア」

もちろん三人分の、である。鶴見の自宅を出る前に、忘れちゃいけないと思って机の上に置いて忘れてきたという。とにかく電話を、とあわてふためいてかけだしていった彼が、すぐ戻ってきた。

「ありました。四十分前におふくろが発見して、妹が持って出たそうです。もう東京駅につくころです」

八重洲中央改札口の電気時計の針がピクンと一と刻み動くたびに心臓のほうもピクンとする。およそ十五、六回ピクンとして、とうとう十一時五十九分。駄目だ、あきらめよう、と顔を見合せた一瞬、愚兄賢妹を絵にかいたような悧発そうなお嬢さんが、雑踏を縫って走ってきた。

「はい切符」

「おう、すまん」

あとは一目散にホームの階段をかけあがって、文字どおり間一髪セーフ。

これから毎月旅に出る、その第一回の、それもスタートからこれでは先が思いやられるが、しかし、ものは考えようで「阿呆旅行」の幕あきにはまことにふさわしい。

「阿呆旅行」というタイトルは、内田百閒先生の名品『阿房列車』の、いわずと知れた模倣である。三十いくつ仮のタイトルを考えたが、一つとして模倣にまさる題はなかった。いうなれば貧の盗みである。ただし盗むについては、先生の腹心中の腹心ヒマラヤ山系こと平山三郎氏を通じて、勝手にせいとの許諾のご返事だけは頂戴したのだが、それにしてもぬけぬけと「阿呆旅行」とは、江國のやつ、気でもふれたのか、と小説新潮F編集長が長嘆息を漏らしたそうである。私にしてみれば、阿房を阿呆に変えることで、早い話が、菊の御紋章の十六花弁を十五に変えるのと同じように、憚りの意を表したつもりだけれど、憚りの意を

表したから犯意が阻却されるというわけのものではない。
で、その百閒先生の『阿房列車』にヒマラヤ山系あり、野坂昭如氏の『黒メガネ道中記』にO青年あり、山口瞳氏の『なんじゃもんじゃ』にドスト氏あり。
「どうしようか、われわれの場合は」
「どうしようって、何をです」
「お二人の呼称さ」
「いいですよ、なんでも」
「ケンボウっていうのはどうだろう」
「健坊？　どうしてです」
「下に症の字をつけてごらん」
「健忘症……あ、こりゃひでえや」
「そちらは亀ちゃんでどうです？　いや、亀ちゃんは安っぽいかな」
「亀ちゃん？」
「カメラマンのカメさ。そうだ、亀羅氏にしよう」
「亀羅？　なんだか正覚坊になったような気がするけど、まあいいでしょう」
「これはいい。正覚坊はお酒に目がないっていいますもんね。いいじゃないですか、亀羅氏で」
と衆議一決したとき、えー罐ビールにジュースはいかが、とビュッフェの手押車が通りか

かって、亀羅氏が「ちょっと、ちょっと、罐ビール」と身をのりだした。

## 2

〔宇治山田発〕二番目にえらいお方は小宮司である。以下、禰宜、権禰宜、宮掌、伶人、衛士長、衛士副長、衛士、技師、技手、雇員、嘱託員、傭人、従業員と続いてざっと六百人。そのてっぺんに位する徳川宗敬大宮司は、福々しいお顔の持主であられた。七十三翁とはとても思えないほど色艶もよく、瀟洒なダークスーツがよくお似合いで、と、世が世ならばそんな観察は許されない。苦しゅうない近う近う、ハハッと平伏する場面である。

「いやあ、僕は水戸だし、それに次男坊だったから気は楽ですよ」

内宮手前の神宮司庁。古めかしくも威風あたりを払うこの建物は明治三十七年の木造建築で、天井の高い洋風の大宮司室には、しんとした空気がみなぎっていた。

「いよいよ遷宮が近づいてきたから、準備でたいへんなんです」

二十年ごとに内宮正殿を建てかえ、いっさいの調度品を新調する式年遷宮の儀は、伊勢神宮最大最高の祭典である。持統天皇の御代に行われた第一回遷宮から数えて千二百八十三年目の、今度が第六十回目に当るそうで、それが昭和四十八年のこと。ことしはまだ昭和四十五年である。「近づいた」といっても、まだずいぶん先の話ではないかと思うのは認識不足であって、前回に例をとると、昭和二十八年の式年のために昭和十六年から準備が開始されている。準備のあいだに戦争が一つ始まって終って、それでまだおつりがくるのだから、わ

れわれの引越しとはわけがちがう。

正殿の様式は「唯一神明造」と呼ばれる。ブルーノ・タウトが、単純質素で世界の建築の王座だと三嘆した日本最古の建築様式である。どれだけ「単純質素」かというと、造営に要する檜が三万五千石、本数にすると樹齢四百年クラスの巨木を含めて一万三千六百本、屋根に葺く茅は長さ二メートル以上直径四十センチの束が二万五千束。ついでにいえば、新規に作りなおす御装束、御神宝が二千五百点。

「そういう古格の技術を伝える工芸家がしだいに減ってきておりましてな。これがいちばん心配なんです。御料木の檜も、このままでは良材が尽きてしまうから、いま五千五百町歩の植林をしております。さよう、二百年後の遷宮にはまにあうでしょう」

国家は百年の計、伊勢神宮は二百年の計。

「終戦まで遷宮は国の事業だった。いまは民間の寄付に仰がにゃならん。こんどの遷宮費用は四十二億円です」

「たいへんですね」

「たいへんなんです。労銀一つにしても馬鹿にならん。万博以後、労銀、あがりましたからねえ」

労銀というすこぶる古風な言葉がとびだして、それが少しも不自然に聞えないところが、徳川御三家の貫禄であった。

五十鈴川にかかる宇治橋を渡ると、老杉鬱蒼たる、そこはもう神域である。平日の午後、

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com